

博士学位論文審査要旨

2024年6月2日

論文題目：玉からみた弥生・古墳時代の社会

学位申請者：廣瀬時習

審査委員：

主査：文学研究科教授 水ノ江 和 同

副査：歴史資料館教授 若林 邦彦

副査：東京国立博物館学芸研究部 部長 河野 一 隆

要 旨：

本論文は、弥生・古墳時代の社会構造の内容とその変遷について、玉の生産技術、生産体制、流通、使用状況などを通じて分析・復元するものである。

玉は、旧石器時代以来の日本列島ではもっとも普遍的な装身具の一つである。そもそも玉とは、一般的には美しい宝石などに用いられる石の総称である。しかし考古学では、紐を通してアクセサリーとして垂下させる孔がある石製品を指す。単独で用いられることもあれば、複数を繋いで用いることもある。また、装身具として身を飾るだけでなく、呪術性や階層性をも表現する考古資料として、考古学界では100年以上にわたって多くの研究が行われてきた。

本論文ではまず、研究史について網羅的かつ徹底的な分析を行い、玉研究で用いられるさまざまな用語、研究者間で異なる玉の種類、点数、出土状況、所属年代の把握と産地同定を悉皆的に行った。そして、大きくは弥生時代、弥生時代から古墳時代への転換期、古墳時代前期、古墳時代中・後期といった4段階の社会構造について、玉の生産技術、生産体制、流通、使用状況（墓への副葬状況）などの観点から、その内容と変遷について分析・復元した。

その結果、縄文時代の装身具や呪術具として使用された玉が、①弥生時代になると朝鮮半島から稲作農耕文化の伝来とともに、その役割が機能分化して祭祀具的な要素が備わった、②弥生時代から古墳時代への転換期では、倭王権が執った地域戦略のなかで玉をその祭祀・儀礼構造のなかに組み込むも客体的な位置づけであった、③古墳時代前期ではそれまでほぼ翡翠に限定的された勾玉の石材に碧玉・水晶・瑪瑙などが加わり、近畿中央部の倭王権と碧玉の産地である出雲との間に密接な関係性が確立した、④古墳時代中・後期には横穴式石室の導入、副葬される武器・武具、渡来文化などと玉との関係性を追究して、玉の存在意義が倭王権と地域との関わりのなかで大きく変化した、ことなどを看破し、玉から見た社会構造の内容と変遷を大局的に説明することに成功した。本論文は、玉に関する地域研究や出土状況の分析を地道かつ徹底的に行ってはいじめて可能になるものであり、従来にない玉研究の新視点として高く評価することができる。

よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

学力確認結果の要旨

2024年6月2日

論文題目：玉からみた弥生・古墳時代の社会

学位申請者：廣瀬時習

審査委員：

主査：文学研究科教授 水ノ江和同

副査：歴史資料館教授 若林邦彦

副査：東京国立博物館学芸研究部 部長 河野一隆

要旨：

上記の審査委員3名は、2024年6月2日 15時00分から18時00分まで3時間にわたり、学位申請者の専門分野の学力確認を行った。

まず、口頭試問では、提出論文に関する詳細かつ多岐にわたる質問が行われたが、いずれに対しても的確かつ明快な応答が得られ、さらに、申請者が考古学に留まらず東アジアの民俗学や生産史についても幅広い学識を有していることが立証された。また、引き続き行われた語学試験(英語)においても、十分な語学力を備えていることを確認した。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博士學位論文要旨

Abstract of Doctoral Dissertation

論文題目： 玉からみた弥生・古墳時代の社会

Title of Doctoral Dissertation

氏名： 廣瀬 時習

Name

要旨：

Abstract

玉は、考古学的研究の主要なテーマのひとつである器物の生産・流通・消費に関わる資料が、充実した研究対象である。但し、研究資料として形態的な諸要素など物質的な情報が多いとは言いが、空間・時間的に充実し、日本列島各地で出土する数量的にも豊富な資料である。その歴史は、旧石器時代にはじまり縄文・弥生・古墳時代、古代と長期に及んでいる。ひとつひとつは指先程の小さな装飾品であるが、連珠にすることにより煌びやかな装いのアクセントとなり、当時の人々の文化・精神的な思考性まで考えることができる貴重な遺物である。また、日本列島で用いられた各種の玉類と同様な形態や素材を用いた製品は、日本列島内だけでなく、朝鮮半島、東アジアに広がりを持つことも重要である。

筆者は、これまで弥生時代から古墳時代の玉を対象に、生産・流通・消費（使用から埋納・廃棄まで）の、さまざまな場面に焦点をあてて研究を進めてきた。具体的には、玉の形態や材質、消費動向、生産・流通について、各地の地域的様相に注目して検討を行ってきた。玉が、当時の人々にどのようにして作られ運ばれたのか、どのような意味で用いられたのかを考えてきた。本論前半では、弥生時代の玉の成立・展開、玉の生産・流通・消費にみる地域色と弥生社会について検討した。本論後半では、弥生時代後期から古墳時代前期における装身具の質的転換と社会の変化、古墳時代の玉や玉生産がどのように社会に組み込まれていたのか、「古墳時代玉体系」の理解について論じた。

序章では、本論の前提として、玉の理解や、対象とする弥生・古墳時代の理解、玉研究の方向性を明らかにした。

第1章「玉と玉研究と本論の目的と手法」では、序章を受けて、玉の基本的な概念や用語についての考えを示した。そのうえで、近代考古学確立以降の玉研究の学史的な整理を行い、主要な玉種の研究動向や玉研究に関わる重要なテーマについて先学の研究を整理した。

第2章「弥生時代の玉とその特質」では、水田稲作の導入にはじまる弥生文化成立期の西日本における韓半島無文土器時代の玉導入の様相から、大陸系装身具としての弥生時代の玉の成立と展開、列島社会の受容の様相を検討した。また、弥生時代の主要な玉類である勾玉と管玉を取り上げ、玉からみた弥生社会の多様性と地域色を明らかにした。

第3章「弥生時代の玉生産と流通」では、管玉の列島における生産開始と各地への広がり、玉生産の構造を検討した。各地に広がる弥生文化は、一方では近接する周辺諸地域との関係性のなかで展開しつつ、他方では広域の経済・社会関係を必要とした。玉生産の拡散は、技術的な結びつきとともに素材の流通という広域の連鎖で弥生社会を結びつけていた。玉から見た弥生社会は、勾玉・管玉などの玉を共有する一方で、製作技術や石材、流通、使い方やその価値についても地域色が鮮明である。本論では、弥生時代の玉生産を中期3段階、後期1段階の4つの段階に分けて評価を行った。近年の新たな成果を受けて、従来からの玉生産の枠組みの再検討を行った。

第4章「弥生・古墳時代転換期の玉生産と古墳時代玉生産の成立」では、まず弥生時代中期から後期への転換期における玉生産を検討した。具体的には、工具鉄器化の様相、玉生産体制の転換や地域社会の動向を検討した。玉生産は、弥生社会の構造的な変革の中で、経済・流通システムの変化に対応して変化した。各地における階層構造の複雑化や地域統合などを背景として、新たな地域関係に対応して新たな生産の枠組みが広がった。これに続く古墳時代の玉生産は、定型化した前方後円墳の成立とその後の石製品の副葬など古墳墓制の展開の中で、石製品生産と同一工房において生産が展開する。古墳時代前期中頃以降の北陸を中心に展開する碧玉および緑色凝灰岩による石製品生産と玉生産は、これらの材質の石製品の副葬が途絶する中期中頭頃を以って衰退する。

第5章「古墳時代玉生産体制の確立と展開」は、古墳時代の玉生産について、近畿中央部・北陸・山陰（出雲）を中心として、玉生産の展開を明らかにした。倭王権中枢の大和・河内における玉生産の実態、王権直轄と言われる大規模生産遺跡「曾我遺跡」の実像の検討を行った。また、古墳時代玉生産を考えるうえで重要な出雲の玉生産について、近畿中央部の玉生産との関連性にも注目して検討した。

第6章「弥生・古墳時代転換期の玉使用形態」では、弥生時代後期、各地で首長層が台頭し大型墳丘墓の造営や副葬行為が顕在化する時期を取り上げた。各地で主要な副葬品目として玉が顕在化して行くが、これは玉自体の質的転換と使用法の変化を伴うものであった。ところが、倭王権の主導した古墳時代開始期の定形化した前方後円墳では、玉副葬は見られない。定形化した前方後円墳への玉の副葬は、古墳時代前期中頃に丁字頭ヒスイ製勾玉・碧玉製管玉やガラス玉が、腕輪形石製品をはじめとする各種石製品とともに副葬される段階に始まる。背景には倭王権による、威信材システムの更新、北陸社会への地域戦略がある。第4章の理解と合わせて、古墳時代の玉の広がりを考えた。

第7章「古墳時代前期の玉使用形態と古墳時代玉体系」では、古墳時代前期のなかでも副葬品組成など古墳が変化する画期である前期後半を取り上げた。玉は、伝統的なヒスイ製勾玉に加えて碧玉・水晶・瑪瑙を用いた勾玉が副葬される。これには、当該時期の日本列島や韓半島における副葬品組成の検討から、韓半島情勢が関係していることが明らかである。また、古墳時代前期の玉副葬の意義について、近畿中央部を中心とした主要古墳副葬の玉類の規格性と配置の検討を行った。そして、古墳時代前期の副葬された玉に「装身具としての玉」と「葬送儀礼の祭具」として副葬されたものがあることを論じた。第4章における石製品の導入とともに本格的に生産が拡大した玉である。前方後円墳体制の拡大するなか、玉から見た葬送儀礼の一側面を考察した。

第8章「古墳時代中・後期の玉使用形態と組成の変化」では、古墳時代中期以降、古墳墓制の変化と関連してその意味を変化させていく玉の使用形態と玉組成を考えた。ここでは、古墳墓制の変化のなかで埋葬施設における玉の副葬形態とその背景を論じた。列島社会は、古墳時代中期以降、東アジア世界との関わりを深め、渡来文化の影響を受けて大きく変化した。こうした古墳時代中・後期の玉の変化と副葬の意義を副葬品の配列の検討を通して明らかにした。また、古墳時代後期については、大阪の古墳出土事例から玉組成やその変化を明らかにし、古墳時代後期における玉の存在とその変化を考えた。倭王権中枢域の古墳における玉の広がりとその変化を検討した。この中では、古墳時代中期以降の渡来文化とその広がりが玉に与えた影響についても検討を行った。

終章「玉からみた弥生・古墳時代の社会」では、これまでの玉と玉生産の歩みとは離れて、古墳時代の玉だけではない様々な器物に見る心的な側面について、その背景を考えた。弥生・古墳時代の玉は、そのひとつひとつは小さな存在である。しかし、一方で連珠として数量的に纏めることにより、その力を増幅させる意図を示す存在でもある。こうした事象は、弥生・古墳時代の人々にとって様々な場面、器物に見られる事象であるとともに、「数量的功德主義」

とも言える数量主義的な考え方があるのではないかと推測した。こうした感覚は、我々にも通じるものであろう。

玉は、弥生時代から古墳時代を通して、両時代・文化を通した広がりを見ることができ考古資料であるとともに、その展開は各地の地域社会のあり方と密接に結びついた存在であった。一方で、古墳時代を中心に社会の紐帯を築くための存在としても用いられた。弥生・古墳時代の人々にとって、「形（かたち）」なき思惟を表象する物であった。玉は、列島を通した文化・社会的な背景とともに、各地の地域的様相をも表出した弥生・古墳時代の社会を紐解く貴重な存在である。